都市の性
——都市の性格の尺度として——

佐佐木綱*

都市の性格を男性的であるとか女性的であるとかによって特徴づけることは可能であろう。たとえば京都という都市の名前を聞くと、多くの人々が女性的であるとの感覚を受けるし、大阪という名を聞けば、男性的であるとの印象を受けるようである。このような感覚は、ドイツ語やフランス語の名詞に性があることからも想像できるように、古代から人類に共通して存在する感覚であろうと思われる。日本語の名詞に性がなかったのは、日本人の感覚が一層繊細であって、個々の山々にそれぞれ性があって、大胆に普通名詞に1つの性を与えることは困難ではなかったかと思われるのである。都市という名詞は、ドイツ語でもフランス語でも女性であるが、日本人の繊細な感覚を生かした都市の性格の把握ができれば、都市を男性化したり女性化したりする事業を考えることも可能となり、土地利用や景観の創造にも一役かうことができそうである。

Gender of Cities
——A Measure of Character of Cities——

Tsuna SASAKI

The concept of gender may be be applied to the classification of city character. When we hear the name of a city, it remains us of either masculine or feminine image for the city. For an example, Kyoto and Osaka will impress us the feminine and the masculine images, respectively. Scientific explanation may be difficult and the unconscious part of our psyche may have an important role for the interpretation of this feeling. It seems to be similar to the gender of nouns in German and French. Though there is no gender of nouns in Japanese, we, Japanese, may recognize the sexual distinction for the each objective. If we recognize the score of fem. or masc. for the each facility on the city map, we will be able to assess the total score of sexuality for the city. The measure would be available for the land use planing and the design of view in the city.

1．男性原理と女性原理

ドイツ語やフランス語の名詞には男性とか女性とかの性があるのに、日本語にはなぜそれがないのか不思議に思われる。ドイツ語には中性が許されているのに、フランス語では男性、女性のいずれかに割当てられている。どのような理由から名詞が性を持ったのか、また英語のように性を失ったことの理由は何なのか、それも最初から性がなかったのか、このことについて言語学的な研究があるものと思われるが[1]、そのような観点からではなく日本語の名詞について考えてみると、山であっても、雌阿寒岳、雄阿寒岳というように、男性の山と女性の山があるように、日本語では普通名詞を大胆に性別に分けるということが困難であったように思われる。日本人の自然に対する感覚が両性いずれかに簡単に分割するのにはあまりに繊細であったのかも知れない。

しかし、このように対象物を男性か女性かどちらかに識別しようとする心的エネルギーは、ドイツ人やフランス人に劣らず日本人においても強いものがあったに違いない。たとえば現在でさえ、私達が路を歩いているときに他人の歩いているのを見たとき、その人が男であるのか女であるのかということに関心を持つことからも想像できるのではないだろうか。それは修養の足らない私だけであるとも思われない。「その人が男性であれ女性であれ、自分にとって何の関係もないのに」ということがわかっていても、

* 京都大学工学部教授
Professor, University of Kyoto
原稿受理　昭和60年7月2日

その人の性を識別しようとするのだから不思議である。

このような心的エネルギーは古代から私達の心の無意識層に潜んでいたものと考えられないだろうか。その感覚が古代においては人間のみならず、一般の普通名詞にまで拡張されていて、自然物を含め、あらゆる物に「生きもの」としての性を感じさせる原因ではなかったかと思われるのである。

日本の仏教の自然観でもある「山川草木悉皆有仏性」という表現も、自然を生きものとしてとらえているし、密教における胎蔵界、金剛界という概念も女性原理と男性原理という2つの世界によって宇宙をとらえているものと思われる。この考え方は事物を性別にとらえるというよりもむしろ機能的な面に男性、女性を見るという観点に立っており、女性原理は、慈悲にあふれた面が強調され、やさしさ、寛容、やすらぎを与えるといった女性的機能が中心である。これに対して男性原理では、理性・知恵が強調され、秩序、きびしさ、たくましさ、強さを与えるといった機能が重視される。しかも「金胎不二」といって、金剛界と胎蔵界とは別々に存在するのではなく、両者が一体となって宇宙を構成していると説いている。俗な言葉でいうと、両原理は「女性は子宮で考え、男性は頭で考える」ということかもしれない。

このような考え方は現在ではユングの心理学を基礎として説明されつつあり、女性原理・男性原理に加えて、親子関係を導入してくると「母性原理」、「父性原理」といわれ、前者は母親の良い面と悪い面とが付加されて、「わが子はすべて良い子」と表現されるように、良い面では平等と寛容、暖かく包み込むといった面を、悪い面では自立を妨げてすべてを呑み込んでしまい最後には死に追い込んでしまうという面を持っている。これに対して父性原理は、父親の両面が加味されて、「良い子だけがわが子」と表現されるように、理性的に切断する、競争させる、区別をするといった面と、破壊して死に至らしめるといった面を持っている。また、この両原理はいろいろな文化の違いを説明するのに便利であると指摘されており、河合隼雄は日本は極めて母性的な社会であると主張している[2)]。

一方、奈良時代に中国からわが国に輸入された陰陽五行説も、まさに宇宙の現象を陰と陽とで説明しようとするもので、当時は政府に設けられた陰陽局において、天文学、歴学、易学を内容としていたものと思われる。陽なる天と、陰なる地との交合により天上に五星（木火土金水の各星）を地上に五行（木火土金水の五要素）を創ったとしており、あらゆるものを陰と陽と五行で説明しようとする1つの思想である。現代において、これらを信じる者はほとんどいないのであるが、ここで重要なことは、このような考え方が何世紀にもわたって続いてきた歴史的事実こそは、陰陽識別の潜在的力が私達の心の奥底に一つの集合的無意識（the collective unconsious）として沈澱している可能性を暗示しているように思われるのである。

また、日本語の名詞そのものには明確な性はないけれども、たとえば母校、母船、母国というように、学校や船や国は女性扱いであることがうかがえる例もあろうし、さらに性別が明確表現されているのは、男女のシャベリ言葉の相違である。従って、名詞に性を与えるのか、シャベリ言葉によって性を表現するのか、その表現に差異はあっても何らかの性の表現をしようとしているのは世界共通ではないだろうかと思われるのである。従ってまた、陰（女性）と陽（男性）とを区別する方法も1通りではないと思われる。

たとえば日本神話の例も、そのことをうかがわせるものがある。天孫降臨の神話では、天つ神（天上の神）が豊穣な土地を求めて天上から降りてきて、それまで日本に住んでいた国つ神（地上の神）と心を合わせて日本の国造りに励んだことになっている。この話を陰陽から考えると天つ神は陽であり、国つ神は陰であろうが、1人ひとりの神々から見れば、女神は陰であり、男神は陽であろうから、その見方、分類の違いによって陰と陽との把握を考え直さなければならない。ここに陰と陽の階層構造を明確にしていかなければならなくなる理由があるのである。個々の陰と陽がいくつか集って全体として陰か陽になり、またその集合的な陰と陽が集って、さらに大きな陰か陽になっていく階層構造を組み立てていく必要があるということである。

以上のように考えてくると、古代から現代に至るまで、事物を陰と陽とで把握しようとする心的エネルギーが継続しているように思われる。それが機能的な女性原理とか男性原理とかいわないまでも、あらゆる現象を陰と陽、もしくは女性と男性という2大要因によって説明しようとする素朴な感情が私達の心の中に脈々としてひき継がれているように思われてならない。ここに私達の住む「町の性」につい

て考えていこうとする立場が生まれるのである。また女性原理、男性原理という2大原理は都市の性格を設計していくときの「設計原理」の1つをなすものと考えている。

2．民族による性感覚の相違

民族によって名詞に対する性感覚が異なることは当然であろうと思われる。いまドイツ語とフランス語に関して調べてみても、ドイツ語では太陽は女性、月は男性であるのに対して、フランス語では太陽は男性、月は女性であって逆になっている。日本人の感覚からすれば、フランス人に近いのではないかと思われる。北の国になればなるほど、太陽の陽ざしはやわらいでくるし、長い冬から春の太陽を待ち望む人々の気持ちからすれば、太陽は女性的感覚を引き起こすように思われるが、南の国では太陽の光の暑さ、きびしさは男性的印象を強めるのかもしれない。大多数の日本人にとって、月は女性を連想するが、太陽については両説が考えられる。太陽の形は不変であり、月のように変らず、その秘められた力の源動力から考えると極めて男性的にみなされるけれども、神話における太陽の象徴としての女神アマテラスを連想すれば女性と考えられるのである。おそらく名詞に対する陰陽の判断は、その国の風土と大きな関連を持つものと思われるのである。

日本人の陰陽の感覚はドイツ人とフランス人のどちらに近いのかどうか調べてみるのも面白いことと思われる。(8月4日に調査したが結果は省略)

最近ドイツ語とフランス語の名詞の性について、その一致性・相違性を調べてみたのがTable 1である。どのような名詞を選ぶべきなのか、果して母集団なるものを設定できるのかどうかも不明であるが、火山、川、沼といった自然物300個、塀、家、倉庫といった建築物354個、色、形、スケッチといったデザインに関係するもの130個、道路、運河、船といった交通施設125個の合計909個について調査してみた。

Table 1　フランス語とドイツ語の名詞の性の一致性
Coincidence of gender between French and German

仏＼独	男性	中性	女性
男性	214語 23.5%	188 20.7	119 13.1
女性	118 13.0	81 8.9	189 20.8

この調査対象となった名詞909個の内、性の一致しているのが44.3%と半数弱を占めており、逆になっているのが26.1%を占めている。

前にも述べたように、日本人の心にも名詞に対する性の意識があるように思われるが、西洋人よりも一層細かい感覚があるようで、民族による感性の違いを感じさせるものがある。たとえば万葉集（巻一一四）に

香具山と耳梨山とあいしとき立ちて見に来し
印南(イナミ)国原

とあるように、この歌は香具山と耳梨山とが畝傍山への愛を互に争ったとき、それをいさめようと出雲から阿菩大神が出立して播磨国まできたが、三山の争いが止んだと聞いてそこにとどまったという伝説（播磨風土記）によるものである。田中喬によれば、雄山である畝傍山をめぐって、雌山である耳梨山と香具山とが愛を争ったと解釈するのが妥当であるとしており、これら三山が地理的3角形をなしているように、人間の三角関係と同じように感じとられている。古代においては、山々はすでに個々に性別されており、それは単なる擬人化ではなく、もともと命のある自然であったとしている[3]。

このように日本人にとって、ドイツ語のように山の性を男性として一律に扱うのは大胆に過ぎるのであろう。もっともユングフラウのように女性として扱う山も出てくるであろうが、その矛盾は時代の差から生じたものと考えればよいのか。また富士山は日本の象徴的山であるが、この山を何度も描き続けている画家の話によれば、その性別は時刻により、見る方向により異なるものであると言う。このような日本人の心の繊細さが名詞に単純に性をつけることを不能にしたのではないだろうか。性的感覚の欠如によるものとは頭底考えられない。従って、都市の性を考えていくときも、このような日本人の性質に十分配慮を加えて調査をする必要があろう。

3．都市の性とその階層構造

名詞についての性を考えるとき、すでに見てきたように、それが普通名詞である場合と固有名詞である場合とについて重大な関心を払う必要がある。普通名詞で考えるときの性と固有名詞としての性とは異なってくるからである。都市という名詞は、ドイツ語でもフランス語でも女性名詞である。日本語においても、母都市という言葉があるように、一般的

には都市は女性であろう。しかし私どもが京都の町を考えると、それは多分に女性的な町であり、大阪といえば多分に男性的な面を持った町と考えられる。また、たとえば山陰の松江は女性的であり、米子は男性的であると感じる。従って、普通名詞の性は固有名詞の性の相違を超越して、それらを包括した概念であり、1つの階層構造を示している。それは「固有名詞と普通名詞の階層構造」でもある。それでは固有名詞としての都市の性はどのようにして決まるのであろうか。

一般的にいえば、生産的都市は男性的であると感じ、消費的都市は女性的であると感じるのが普通であり、それは機能的に見れば、生産性・経済性・効率性・迅速性・耐久性といった合理的機能を追求する町が男性的であり、静寂さ・芸術性・居住性・安全性・象徴性といった非経済的機能をも求める町ほど女性的と感じるようである。またそれは、工場とそれに伴う煙突、中枢管理機能と経済的支配力を表わす高層ビルによる高度の土地利用にも現われてくる。いわば「筋肉隆々たる裸の男性」を連想させる町と、公園や緑の多い静かな低層住宅のある「着物を着た女性」を連想させる町との相違であるかもしれない。

しかしながら、多くの町は明確に性別をつけがたく、その町をいくつかの地域に分けるとすれば、その地域毎に男性らしさ、女性らしさの度合が異なってくるものと思われる。そこに地域毎に分割して性を論じ、かつまたそれらの地域を含んだ全体の地域での性別度を判断していく必要が生じてくる。そこに陰陽の「地域別の階層構造」をとらえる必要性が生まれるのである。

また公園といった場合、多くの人が女性的施設と答えるのであるが、その公園内にある施設によってその女性度は異なるであろう。たとえば運動公園的になれば男性度が増加してくることは避けられない。細かく言えば、公園内の施設で、砂場、すべり台であれば女性的施設であろうし、ブランコ、鉄棒となれば男性的施設といえようし、公園内の施設の整備状況によってその女性度が異なってくるわけである。このような細かい施設の集合体としての大きな施設の性を考えなければならない「施設の階層性」というものもある。

このような陰陽の階層構造は簡単に記述すれば、Fig.1に示す通りである。

私どもは都市全体としての男性度もしくは女性度というものをアンケートで求めることができる。そしてまた、それを構成しているサブマテリアルの性別の度合いをアンケートしてスコアー化することもできるのである。従って、構成要因の性別のスコアーとそれらをアグリゲイトした施設のスコアーとを結びつける計算式を求める必要性が生じてくる。

4．陰陽のバランスと都市の性の設計

巨視的に見た都市の性というものは、多分にその人の主観的なものであり、また現状の都市をどう感じるかということの他に、その都市がこうあって欲しいという期待を込めた性の度合いを計画したいことがあるかもしれない。そこで問題を2つに分けて、現在の都市が持つ陰陽の度合いを客観的に判断する研究と、住民を含めた国民的合意に即した陰陽の尺度に合った都市の設計をどのようにすべきかといった研究とに分けて考えていく必要があろう。

前者のアプローチは地物や施設の陰陽の度合いと、陰陽の階層構造を明らかにすることによって遂行することができるが、後者のアプローチは、その都市に対する皆の期待がどのようなものであるかによっ

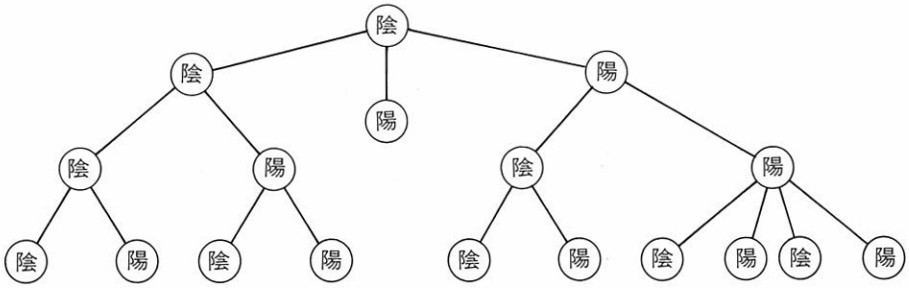

Fig. 1　陰陽の階層構造
Hierarchical structure of fem. and masc.

て異なってくるわけであり、その都市の歴史・文化がどのようなものであったかという単に過去の性の尺度に近づけるだけでは計画として不十分であるし、国土の上での地域的な陰陽のバランスに立ちながら、個々の都市の性を考えていかなくてはならないであろう。現在の段階としていえることは、経済の高度成長によって陰陽のアンバランスが急速なテンポでもたらされたことである。心の無意識層にあると思われる陰陽のバランスを求める気持ちが、父性原理に基づいた都市の男性化に対して母性原理による都市の復権を要求しているように思われる。日本の文化が母性的であることを特徴としているのであればなおさらのことである。ここに都市計画に先だって、これまでの歴史の中でその都市が担ってきた陰陽の性格を知りたい理由の1つがあるのである。男性的な要因が整備されていくと、逆に女性的なものを求める気持ちがコンプレックスとしてその人の心に蓄積し、それが都市の女性化へのエネルギーとなって爆発してきているのが現代ではないだろうか。

都市の現在の陰陽の尺度を求めるためには、都市地図の上に記載されている諸施設に対する陰陽の度合いを記入していく必要があり、それらのスコアーとしては、その町をよく知っている人々を集めて各施設に対する採点の平均値を採用し、陰陽の尺度を客観化する必要がある。また道路であっても、街路樹や歩道があればそれによってその道路の女性化の度合いが強くなってくる。このようにして採点されたサブマテリアルを、いくつかの地域毎にアグリゲイトして尺度化し、最終的に当該都市の性の度合いを判断するのである。現在2、3の都市について調査し、その性別を判定するケーススタディを行っているので、後日報告をしたいと考えている。

参考文献

1）ピエール・ギロー著，中村栄子訳，言語と性―文化記号論の試み―，白水社，1982
2）河合隼雄，母性社会日本の病理，中公叢書，1982
3）田中喬，風土と造型，風土分析と地域計画，地域交通計画研究所，p.103-130，1985